

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

German Volkskunde and Cultural Anthropology

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003932

ドイツの民俗学と文化人類学

森 明子*

German *Volkskunde* and Cultural Anthropology

Akiko Mori

In order to introduce German *Volkskunde* as a neighboring discipline to cultural anthropology, I try to shed light on the historical process of this discipline at research institutes in German universities, especially after World War II. German *Volkskunde* had established its position as an academic discipline, with a chair of its own at a university, under the National Socialist regime, and ideologically had played no small part in supporting Nazism. It naturally follows that since the end of the war German scholars have had to keenly reflect on and firmly criticize the discipline's past. They have begun to define and redefine theoretically their conceptions of the discipline, as well as its boundaries with related disciplines. They have brought many old concepts of *Volkskunde* to an end and sought to turn the discipline into an applied cultural science, concerned with the analysis of both the past and present. In this process German *Volkskunde* has come to call itself cultural anthropology. This article argues this process with special reference to the University of Tübingen, and considers the current methodological orientation of professional education referring to the Humboldt University of Berlin. I discuss in conclusion the developing relationship between German *Volkskunde* and cultural anthropology.

*国立民族学博物館研究戦略センター

Key Words : folklore, cultural anthropology, European ethnology, history of discipline, methodology

キーワード : 民俗学, 文化人類学, ヨーロッパ民族学, 学問史, 方法論

1 課題とその背景	展開
2 大学研究所における分野の名称変更	4 大学教育の素描
3 テュービンゲン大学における民俗学の	5 隣接分野としての民俗学

1 課題とその背景

課題

与えられた課題は、文化人類学の隣接分野として、ドイツの民俗学を紹介するというものである。私は、第二次世界大戦後のドイツの民俗学がたどってきた過程を跡づけることで、この課題に応えたいと思う。のちに述べるように、ドイツの民俗学は、ナチスの国民社会主義 *Nationalsozialismus* のもとで大学に講座を獲得し、ナチス政権の「イデオロギー的な燃料供給源」としての役割を果たした。その帰結として、戦後は学のあり方を根底から問い直すという課題を背負うことになった。20世紀後半の社会状況と学問環境のなかで、分野を再構築していく過程で、ドイツの民俗学は、隣接分野との境界を見直し、自らを文化人類学と称するようになる。小稿は、この過程の一部を紹介するものであり、分野名称をめぐる議論に焦点をあてる。まず2000年代初頭のドイツの民俗学の状況を概観し、そこにいたる展開の過程をたどっていくことにする。

ところで、ドイツの民俗学と文化人類学は、どのような位置関係にあるだろうか。文化人類学の中心概念である「文化」概念が、18世紀から19世紀にかけて形をなしていったドイツの「文化」を起点にすることは、すでに了解がある。ドイツからF. ボアズを介してアメリカに持ち込まれた「文化」概念は、20世紀をかけて国際的に強い影響力をもつアメリカ文化人類学界を主要な議論の舞台として鍛えられていった。一方、ドイツの民俗学は、同じ「文化」概念を起点にし、ドイツにおいて哲学や社会学などを隣接分野とする参照関係をもちながら展開した。しかもこのふたつの学問分野は、ともに「エスノロジカル」な方法論に執着する文化研究という共通点もっている。現在のドイツの民俗学は、このふたつの分野の境界を見直そうとしているわけである。

ここで私が注目するのは、学が配置される時代背景である。この100年あまりのあいだに起こったことは、近代国家の境界線の引きなおしであり、自文化／国民文化／

異文化の境界線の見直しだった。学問分野が配置される時代の社会的文脈を意識しながら、以下の叙述を進めていこうと思う。

ヨーロッパ人類学のスタンス

私自身の経験から述べていくことにしよう。私は、ヨーロッパ社会を対象として文化人類学を学ぶ者である。1980年代に勉強をはじめたころ、ヨーロッパの人類学研究はまれで、日本でもヨーロッパでも問題関心を共有する研究者をなかなか見つけることができなかった。1986年にウィーン大学に留学したとき、私は対話の相手を求めて4つの研究所を訪れた。民俗学（フォルクスクンデ Volkskunde）、民族学（フェルカーンデ Völkerkunde）、日本学（Japanologie）、経済史社会史研究所（Wirtschafts- und Sozialgeschichte）である。

文化人類学を名のる研究所はなかったが、日本の人類学関係の教科書が教えるところによるなら、民族学（フェルカーンデ Völkerkunde）がこれに相当すると思われた。しかし私はウィーンで、フォルクスクンデ 民俗学と フェルカーンデ 民族学は、前者がヨーロッパ社会を、後者がヨーロッパ以外の社会を対象とする、という説明を受けた。ドイツ語圏の大学は、ドイツ・オーストリア・スイスを含めて、共通の大学システムをもっている。そのドイツ語圏の大学で、この説明は共有されているということだった。

このように区分するならば、少なくとも私にとって、ドイツの フェルカーンデ 民族学を人類学と問題意識を共有する分野と考えることはできなくなる。人類学が、研究対象とする社会をあらかじめ限定するという考えに、私は納得しないからである。ドイツの フェルカーンデ 民族学は、ヨーロッパ社会を人類学的に研究するというヨーロッパ人類学の問題関心をもちえない。いっぽう、ヨーロッパを研究対象とした フォルクスクンデ 民俗学は、ヨーロッパ内に関心を限定している点で、人類学のスタンスとは大きく異なる。

ある程度予想したことであったが、当時のウィーンの フェルカーンデ 民族学と フォルクスクンデ 民俗学は、私の問題関心にこたえてくれるものではなかった。日本学研究所は、もともと フェルカーンデ 民族学から独立したもので、岡正雄をはじめとする日本の人類学（民族学）研究者とのかかわりの深い研究所であるが、1980年代半ばの当時は、現代日本の社会学的研究を中心に研究と教育を進めていた。

結局、方法論的にも研究内容の点でも私の問題関心と重なり、多くを学んだのは、経済史社会史研究所だった。当時の経済史社会史研究所は、「新しい歴史学」「下からの歴史」という問題関心を前面に打ち出して、新たな展開をとげている時期だった。その中心にいたのが、M・ミッテラウアー Michael Mitterauer である。中世史研究から家族史研究へと研究の焦点をシフトしていったミッテラウアーのもとで、研究所全

体が歴史人口論やオーラルヒストリーに関心をひろげ、研究と教育を進めつつあった。学際的な共同プロジェクトを次々に展開し、ドイツ語圏を越えてヨーロッパ大陸や英米の研究者との交流も活発だった。

1980年代後半から90年代にかけての歴史学・民俗学・人類学の問題関心

いま思い返してみると、1980年代半ばの私のウィーン経験は、この時期の学界の状況をよく反映したものだったと思える。当時、ウィーンのエconomic社会史研究所で起こっていたことは、70年代以降の社会史の動向のなかに位置づけられる。日本では、フランスのアナールの紹介がめだっているが、イタリアではC・ギンズブルク Carlo Ginzburgをはじめとするミクrostóriaの動きが展開していたし、ドイツ語圏では日常史と呼ばれる動きが展開していた。歴史学者によるこうした「新しい歴史学」は、人類学の問題のとらえ方を積極的に摂取しようとして、自らの問題関心を「歴史人類学」と名のっていた(森1993)。

ドイツ語圏におけるこの動向を形にしたもののひとつが、『歴史人類学—文化・社会・日常』*Historische Anthropologie – Kultur/Gesellschaft/ Alltag* というジャーナルの創刊である。所属機関を異にする3人の歴史学者と1人の民俗学者が中心になって、数年の準備期間を経て1993年に創刊された。この4人のなかに、上述のミッテラウアーと、後述するテュービンゲン大学の民俗学者U・イエグレ Utz Jeggle が含まれている。歴史人類学を学際的な研究領域として設定し、研究対象地域としてはヨーロッパ社会も非ヨーロッパ社会も排除することなく取り込んでいこうとする姿勢を打ち出した。

歴史学と民俗学を中心にしたこの動きが起こっていたころ、当時のヨーロッパの人類学会では、イギリス、フランスを中心として、アメリカの文化人類学に対抗し、ヨーロッパの社会人類学を再確認していこうとする動きも起こっていた。1989年に設立されたヨーロッパ社会人類学協会 European Association of Social Anthropologists/ Association Européenne des Anthropologues Sociaux (EASA) は、1992年から『社会人類学』*Social Anthropology* 誌を創刊している。学会設立時に意識されていたのは、C・ギアツ Clifford Geertzをはじめとする「文芸としての人類学」という傾向に対する警鐘であった。ドイツ語圏の^{フェルカーンデ}民族学研究者たちは、英仏の人類学者の動きに従っていた。1980年代後半から90年代にかけては、アメリカ文化人類学会で民族誌批判をめぐる議論が展開していった時期に当たるが、私は当時のオーストリアで、^{フェルカーンデ}民族学研究者たちがこの問題について議論する場面に遭遇したことはなかった。

2 大学研究所における分野の名称変更

民俗学の名称変更

さて、上にみてきた動きのなかで、^{フォルクス Kunde}民俗学は、^{フェルカー Kunde}民族学よりも歴史学と歩調をあわせて、「新しい歴史学」「歴史人類学」へと展開していったようにみえる。この民俗学の展開過程を跡づけていこう。その際、民俗学の名称変更を糸口とする。以下では、エスノロジーはカタカナで、^{フェルカー Kunde}フェルカー Kunde は民族学とルビをふり、民俗学はルビなしで表記することにする¹⁾。

はじめに現在のドイツ語圏の大学において、民俗学研究所がどのような名称を名のっているのを見る。というのも、それぞれの大学によって、分野名称が異なっているからである。異なる名称をもつことは、冒頭でもふれた国民社会主義時代の民俗学の歴史とかがわっているのであるが、これについては、後に述べる。

民俗学を専門的に研究する大学研究所が、現在どのような名称を使っているのか、いくつかの大学の例を資料1に示した。分野名称としてあがる用語は「経験文化科

資料1 Volkskunde から名称変更した研究所の現在の名称

「経験文化科学」

テュービンゲン大学: Das Ludwig-Uhland-Institut für Empirische Kulturwissenschaft
(ルートヴィヒ・ウーランド経験文化科学研究所)

「ヨーロッパ・エスノロジー」

ベルリン・フンボルト大学, ウィーン大学, フライブルグ大学等: Institut
für Europäische Ethnologie (ヨーロッパ・エスノロジー研究所)

「文化人類学」「ヨーロッパ・エスノロジー」の組合せ

フランクフルト大学: Institut für Kulturanthropologie und Europäische
Ethnologie (文化人類学とヨーロッパ・エスノロジー研究所)

ゲッティンゲン大学: Institut für Kulturanthropologie/ Europäische Ethnologie
(文化人類学/ヨーロッパ・エスノロジー研究所)

「民俗学」「ヨーロッパ・エスノロジー」の組合せ

ミュンヘン大学: Institut für Volkskunde/Europäische Ethnologie (民俗学/ヨー
ロッパ・エスノロジー研究所)

学」「ヨーロッパ・エスノロジー」「文化人類学」「民俗学」の四つで、それらがときに単独で、あるいは組み合わせて用いられる。いずれも、もとは「民俗学」あるいは「ゲルマニスティーク（ドイツ語・ドイツ文学研究）Germanistik」を名のっていた研究所が、1970年代以降、民俗学のあり方を議論する過程で変更していったものである。

学会における議論においても、名称変更の実践においても、この民俗学の改革運動をリードしたのはテュービンゲン大学だった。テュービンゲン大学は1971年から経験文化科学 *Empirische Kulturwissenschaft* を名のっている。ただしこの名称を名のるのはテュービンゲン大学が唯一例で、その状況は現在に至るまでかわらない。

現在もっとも多く使われている名称は、「ヨーロッパ・エスノロジー」 *Europäische Ethnologie* で、これは近年名称変更した複数の大学が採用している名称でもある。たとえばベルリン・フンボルト大学、ウィーン大学、フライブルグ大学などがあげられる。「ヨーロッパ・エスノロジー」が他の語と組み合わせて使われる場合もある。フランクフルト大学とゲッティンゲン大学では「文化人類学」と「ヨーロッパ・エスノロジー」を並列し、あるいはスラッシュをはさんでつなげている。一方、ミュンヘン大学は「民俗学」と「ヨーロッパ・エスノロジー」を、スラッシュをはさんでつなげている。

「民俗学」という名称が、単独で用いられる研究所は、私の調べた範囲で、現在では存在しない。最後まで使っていたのはフライブルグ大学であるが、同大学も2003年に「ヨーロッパ・エスノロジー」に改めた。

多くの大学研究所が「ヨーロッパ・エスノロジー」を含み、またもっとも最近になって名称変更した大学研究所もこれを採用していることから、名称変更の大きな流れを「民俗学からヨーロッパ・エスノロジーへ」と総括しても、それほど間違っていないだろう。とはいっても、ある学問分野について複数の専門研究所が、分野の名のりにおいて一致しないことは、近代の大学制度のなかで一般的なことではない。それぞれの研究所が、その分野名称のもとに、研究目的や対象を説明し、方法論や隣接分野との関係について述べているのであって、それを見ると、第二次世界大戦後の社会的文脈のなかで、ドイツの民俗学がそれぞれの研究所の単位で、さまざまな議論を重ねつつ学を再構築してきた過程をうかがうことができる。

「経験文化科学」, 「ヨーロッパ・エスノロジー」, 「文化人類学／ヨーロッパ・エスノロジー」

テュービンゲン大学, ベルリン・フンボルト大学, ゲッティンゲン大学が, 「経験文化科学」, 「ヨーロッパ・エスノロジー」, 「文化人類学／ヨーロッパ・エスノロジー」を, それぞれどのように規定しているのか, 以下にみていこう。はじめにあげるのは, テュービンゲン大学の研究所が発行した要覧の冒頭に「分野」としてあげられている文である。この要覧に発行年の記載はないが, 他のページに2002年に刊行した書物の情報を記載していることから, 2002年以降に発行されたものであることは間違いない。次はベルリン・フンボルト大学の要覧の叙述で, 2000年に発行されたものである。同じ文が, ベルリン・フンボルト大学のホームページの研究所サイトにも掲載されている(2008年7月)。3番目はゲッティンゲン大学のホームページの研究所サイトに掲載されている文である(2008年7月)。

「経験文化科学 Empirische Kulturwissenschaft」テュービンゲン大学

経験文化科学(EKW)は, 民俗学の伝統から発達した。ほかではこの分野をヨーロッパ・エスノロジー, 文化人類学, 場合によってはいまでも民俗学と称している。研究されるのは, 社会科学や歴史学のツールを使った, 現代や近い過去の文化現象である。他の分野の文化研究とは違って, 高文化や上流階層の文化ではなく, 一般の人たちの生活様式や解釈を問題にする。とくに日常生活の象徴的な秩序やその歴史的な変化に関心をよせる。そうした現象を, 民族誌的な分析(フィールドワーク, 観察, インタビュー, 厚い記述), 文化史的な文献研究や, 社会的文脈のなかでの解釈学的方法をもって研究する。その際, 文化, 権力, 不平等の関係をつねに考慮する。

民俗学の過去とのつながりが切断されたわけではない。テュービンゲンは, 口頭伝承や民衆絵, 物質文化の研究について, 現在もこの分野をリードする問題提起をつづけている。同時に経験文化科学は, 現代世界の多くの人々の文化の研究に関して, エスノロジー, 文化人類学, カルチュラル・スタディーズ, 社会科学や歴史学の, 刺激的な隣接科学として位置づけられる(研究所要覧「分野」: 4-6)。

「ヨーロッパ・エスノロジー Europäische Ethnologie」ベルリン・フンボルト大学

ヨーロッパ・エスノロジーは, ベルリンでは, 若く前途が期待されるディシプリンである。古典的な社会科学が, 多くの専門分野に細分化され, 後期モダンの社

会現象や社会過程を経験的に分析する説明能力において限界に達したという明確な認識に基づいて、ヨーロッパ・エスノロジーは、民俗学・エスノロジーと歴史学の横断領域の樹立を試みる。(中略)ヨーロッパ・エスノロジーの中心的な理論概念として「文化」がある。それは伝統、価値、行動モデル、象徴の永続的に繰り返す確固としたシステムとして理解されるものではなく、「国民文化」と定義されるような政治—地理—言語のまとまりとして地図上に表示されるものでもない。文化は、人、集団、社会が互いに交通し、互いを理解し、また互いの境界を定めるときの規則的、実践的な交渉の持続的な過程を示すものとして理解される。人はいかに共同生活を組織するのか、社会的自然的環境に対してどのような関係をつくり、この関係からどのような像をつくるのか、一見容易にみえるこのような日常文化への問いが前景にある。(研究所要覧「ヨーロッパ・エスノロジー」: 4)

「文化人類学／ヨーロッパ・エスノロジー Kulturanthropologie/Europäische Ethnologie」
ゲッティンゲン大学

文化人類学／ヨーロッパ民族学、略してKAEE（他の大学では、民俗学あるいは経験文化科学とも称されている）は、歴史学、言語学・文学、美術史、民族学^{フェルカーグンデ}、宗教学などと近い関係を持ち、ヨーロッパ領域の住民の生活様式を研究する、文化科学のディシプリンである。研究対象は、価値や規範の表現としての精神文化や物質文化、ならびに社会階層や社会集団のあいだでおこなわれる相互交渉過程である。文化人類学的文化分析の目的は、比較という方法を使って、現在および過去の日常生活の持続性と変化を明らかにし、可能ならば我々の社会の社会文化的問題の解決に参加することである（研究所ホームページ「分野理解と研究対象」）。

「経験文化科学」「ヨーロッパ・エスノロジー」「文化人類学」の三語は、排他的なものではなく、現在のこの学問分野を呼ぶキータームとして相互に言及しあっている。強調するところが若干異なるとしても、基本的な共通性は指摘できる。具体的には、民俗学の系譜をひくものであること、複数の隣接分野と密接な関係にあること、文化科学であること、方法として「経験」を重視すること、研究対象として「日常」に焦点をおくこと、地理的空間としてヨーロッパを対象とすること、歴史と現代を遠近法のもとにおくこと、文化のダイナミクスに関心をよせ、文化を実践的な交渉の過

程としてとらえること、などがあげられる。

ここに見られる「文化」のとらえ方は、明らかにアメリカ文化人類学の文化理解と通じる。複数の人文社会科学の理論をとりこんでいることも、文化人類学のあり方と共通している。分野名称に文化人類学を含むフランクフルトやゲッティンゲンのような大学もあるが、名称に含まない場合であっても、その内容はあきらかに文化人類学との親縁関係を示している。

学会と学会誌の名称

なお、研究所の掲げる分野名称が、このように個々に異なる一方で、これらの分野が所属する学会名称および学会誌には、依然として民俗学^{フォルクス Kunde}という名称が維持されていることに留意しておきたい。ドイツの民俗学の中央学会にあたる組織は、1904年に「民俗学協会連合」Verband der Vereine für Volkskundeが、その名前が示すとおり、複数の民俗学協会の連合組織として発足した。この組織を引き継ぐ形で、1963年に「ドイツ民俗学会」Deutsche Gesellschaft für Volkskundeが創立され、現在にいたっている。学会誌は、1900年ころに発刊された『民俗学雑誌』Zeitschrift für Volkskundeが現在にいたるまで継続して発行されている。

学会名称を変更することなく維持しながら、個々の研究所のレベルで、分野名称を改め、その分野を規定していったドイツの民俗学のあゆみは、日本の文化人類学会が名称変更した経緯と対照的である。後者は、2004年に学会名称とそれともなう学会誌の名称変更もおこなったが、その名称変更が、学問分野の目的や対象、方法論を問う議論と直接むすびついていたわけではない。ドイツの民俗学においては、学のあり方そのものへの根本的な問いがなされたのであって、そこには、ドイツにおける学をとりまく歴史的、社会的な背景が大きく影響していた。議論は学会を舞台にしても大に行われたが、それ以上に、それぞれの研究所で徹底して行われ、実践に移されていった。次の節では、その経緯を、テュービンゲン大学の例をひきつつ、見ていくことにしたい。

3 テュービンゲン大学における民俗学の展開

ドイツの民俗学は、1930年代に国民社会主義政権と接近することによって発展し、その帰結として、戦後はそこからの脱却、すなわち学の脱ナショナル化と国際的な認知を至上命題とした。この重い課題が、ドイツの民俗学内部での、学そのものに対する

る厳しい、執拗な問いかけの背景にある。前節までに述べてきた名称変更は、この動きのなかで起こったものであり、それは文化人類学を含む隣接分野との境界の問い直しでもあった。この問い直しの過程は、1960年代から現代にいたるドイツの政治的、経済的、社会的文脈のなかに配置してとらえる必要がある。以下に、その過程をみていこう。以下の記述は、テュービンゲン大学の教授であるG・コルフ Gottfried Korff の論文に多くを負っている (Korff 1996)。

20世紀前半まで

民俗学が、学としてドイツにその形をあらわすのは19世紀である。J・G・ヘルダー Johann Gottfried von Herder の名前やドイツ・ロマン主義は、文化人類学の「文化」概念の系譜をたどるときかならず言及されるが、ドイツの民俗学も、この同じ水源からW・H・リール Wilhelm Heinrich Riehl を介して発達した。文化人類学が、E・デュルケム Émile Durkheim やM・ヴェーバー Max Weber, K・マルクス Karl Marx をはじめとする社会学や経済学の理論をとりこみながら、主としてアメリカ合衆国において、異文化研究という文脈で文化概念を鍛えていった一方、ドイツの民俗学は、20世紀の半ばまでゲルマニスティック (ドイツ語・ドイツ文学研究) に含まれる一分野として、ドイツの地方の慣習や方言、芸能などを対象として、その文化研究を展開していった。

国民社会主義政権と民俗学

ドイツの民俗学が、ゲルマニスティックから分かれて、大学で独立した講座として認められるのは、すでに述べたように、ナチス政権下においてだった。テュービンゲンの民俗学が独立した講座になったのは1934年で、1936年にはドイツで最初の大学研究所をもった。当時の所長のもとで、国民社会主義によりそった民俗学を展開し、同じく政権に近い立場をとっていた先史学、人種学に意識的に接近して、ともにナチスのイデオロギーを支えた。具体的には、メディアと結んで教育的効果のある情報活動に積極的に関わったことがあげられる。たとえば当時製作された映画には、研究所所長が得意満面にベルリンの帝国局との協力関係について述べている場面がある。国民芸術のレプリカが、「今日の国民社会主義的民俗学が定める世界観の処方」にしたがって収集・展示された。ドイツ人の本質の特徴を明らかにし、また認識することがその目的とされていた。研究所のおこなったこれらの仕事において、メディアとしての近代性、テーマとしてのアルカイック性、学問としての精確さ、そして大衆の好み

が、意味深長な一体化を遂げていた。それは学生だけでなく〈国民〉もひきつけるものであり、こうした仕事を通して、研究所は国民社会主義の文化理解、学問理解の形成に加担した。

敗戦から研究所再開へ

戦後、テュービンゲン大学はフランス占領軍の統制下にはいり、民俗学研究所は封鎖され、所長は解雇された。授業が再開されたのは、ドイツの他の大学に遅れて1950年代末になってからだった。ナチス政権にとくに近い立場をとっていたこの研究所を存続させるために、戦後この研究所は、フランス人にも尊敬される人文学者の名前をとって、ルートヴィヒ・ウーランド研究所と名称変更した。

敗戦直後から、国民社会主義的な民俗学に対する批判や再考はおこなわれていたが、当初散発的だった議論が本格化していったのは、1960年代になってからである。1950年代は、後の時代から「静寂と慎重の10年」と呼ばれた。この時期の西ドイツは、アデナウアー政権のもとで、「奇跡の経済」Wirtschaftswunderと呼ばれる経済復興をとげていた期間に当たり、人々の関心は社会批判よりも生活向上に向けられていた。

1960年代の批判的議論の展開

国民社会主義と民俗学の結びつきに対する批判と民俗学の再考をめぐって、はじめの徹底的な議論を展開したのは、テュービンゲン大学ルートヴィヒ・ウーランド研究所のH・バウジンガー Hermann Bausinger だった。

バウジンガーが、1961年に出版した『科学技術世界のなかの民俗文化』は、文化の脱伝統化を論じて、民俗学の新しい方向性を示した記念碑的な書である。民俗学がいつまでも田舎の祭りや古い慣習、民俗衣装などばかりに関心を寄せていることに疑問を呈し、現代社会に目をむける必要があること、そのために通俗文学や日常文化を研究対象にする必要があることをとなえ、社会と結んだ学の方向性を示した。本書の冒頭にバウジンガーは、B・ブレヒト Bertolt Brecht の文を引用しながら、〈フォルク Volk〉という語が内包する血と土の集団主義から離脱して、民俗学は〈住民 Bevölkerung〉概念をキータームにするべきだと述べている。そのブレヒトの文は、はじめ反ファシズム運動のピラに書かれ、1934年に当時非合法だった雑誌に掲載されたものである。「フォルク」とファシズムが連続しているという認識、この連続性から離脱することが、民俗学の革新運動を動機付けていたことを示す例といえるだろう

う。あらためていうまでもないが、「フォルク」は「^{フォルクスランド}民俗学」を日本語に対応させたとき「民俗」にあたる語である。バウジンガーの仕事を筆頭に、1960年代のドイツの民俗学は、国民社会主義と蜜月関係をもった学問の過去を批判し、そのあり方を根本的に問い直す議論を展開していった。

民俗学を問い直す議論は、当時のドイツ社会に広くみられた社会批判と相照らしあうものだったことに注意したい。60年代のドイツ社会は、ナチスの過去と対峙して自らの歴史を徹底的に批判し、さまざまな社会運動を展開していった時代だった。大学では、学生たちがナチスの暴走をゆるした親の世代を批判することから、学生運動が展開した。1964年にバウジンガーがおこなった「民俗学のイデオロギーと研究」と題する講義は、このような当時の社会的文脈に配置される。この時期、学生の批判に教授たちが応える形式で、いくつもの講義がおこなわれた。そのようなリレー講義のひとつだったこの講義は、民俗学と国民社会主義との関係を批判する、最初のまとまった議論だった。

ファルケンシュタイン論争

全世界でほぼ同時に展開した学生運動が頂点に達したのは1968年だった。学のあり方を問い直すドイツ民俗学会の議論も60年代末から70年代にかけて頂点に達した。1969年の全国大会、翌1970年の専門部会（ファルケンシュタイン論争）で、ドイツ民俗学会は、民俗学の目的、対象、方法論、理論を問い直し、あたらしい学の名称を議題にした。

その背景には、過去の民俗学の姿勢を反省し克服するために、民俗学はゲルマニステイクから距離をとり、脱ナショナル化をとげ、国際性を獲得する必要がある、という共通認識があった。この分野を文献学としてではなく、社会学や社会心理学に近い社会科学として位置づけなおすこと、そのために社会科学にふさわしい理論と方法論を確立するべきであることが議論された。このときおこなわれた学会アンケートであたらしい学の名称として多くの支持を得たのは、「文化人類学」と「ヨーロッパ・エスノロジー」だったという。それらが国際性をもつ名称と考えられたためである。しかし専門部会の議論では、過去の民俗学を批判するために、より革新的で理論志向的な学の名称を求める意見が優勢を占めた。

1971年の名称変更

テュービンゲン大学は、「経験文化科学」を新しい分野名として採用し、1971年に

「ルートヴィヒ・ウーランド経験文化科学研究所」と名称変更した。学会をあげて行われた論争を最初に実践したこの名称変更は、当時の大学改革の枠組みのなかで実現した。チュービンゲンでは、学生運動と、大学改革と、民俗学の改革が、重なり合いながら進行したのである。

コルフは、従来の^{フォルクスクンデ}民俗学でもなく、「ヨーロッパ・エスノロジー」や「文化人類学」でもなく、「経験的文化科学」という名称をチュービンゲンが選択したことは、当時、知識人サークルや教育・文化事業の全般に影響を与えていた思想と深くかかわっていたという。それは第一に、社会科学の理論と方法、第二に、「文化」の脱伝統化、第三に、アデナウアー時代への社会批判である（Korff 1996: 418-422）。それぞれについてみていこう。

まず、ゲルマニスティックの古い体質からの離脱をはかろうとする民俗学は、社会科学への接近をはかり、社会科学にならって理論と方法論をうちたてようとした。とくにバウジンガーが関心を寄せたのは、フランクフルト学派の社会学、哲学、社会心理学である。「経験文化科学」という名称に含まれる「経験」は、T・W・アドルノ Theodor W. Adorno と K・R・ポパー Karl R. Popper, J・ハーバーマス Jürgen Habermas と H・アルバート Hans Albert のあいだで展開した実証主義論争における、アドルノの「経験」概念に由来すると考えられる（アドルノほか 1979）。それは「経験的研究が、存在法則の概念を神話化させないように守ることができるはずだ」（アドルノ 1979: 105 ただし訳文を一部改めた——引用者）という表現に示されるように、「経験的研究」に調整機能を見出そうとするものだった。チュービンゲンの経験文化科学は、このような「経験」に依拠することによって、古い民俗学の素朴な経験主義と、本質主義的拡張をおさえこもうとしたといえるだろう。ただし、理論的であると同時に経験的であるという主張は、不確実性も抱え込むものだった。

第二の「文化」の脱伝統化は、1970年前後に「あらゆる人のための文化」論による文化教育政策が推し進められたことと関わっている。すでに60年代から通俗文学と日常文化の研究を展開していたチュービンゲンは、この政策によって決定的な駆動力を与えられ、経験文化科学は、社会と結びついた啓蒙的な問題解決の学という新しい性格を加えた。

第三の社会批判は、「奇跡の経済」と呼ばれる経済発展を遂げた当時のドイツ社会の市民意識に対して、対抗的な意識が成長してきたことを示唆している。アデナウアー時代の経済発展のもとで、ドイツの過去は忘却され、内面性は形式化して、「教養市民の黄金の中庸」理念が復活した。それに対抗する前線が60年代末から70年代

にかけて形成されたのである。

テュービンゲンの「経験文化科学」は、1970年代初頭のこのような思潮のなかで、成立した。

1980年代以降

以上に見てきたように、テュービンゲンの民俗学は、1970年代初頭に社会科学を志向する文化科学として、「経験文化科学」という名称のもとに再構成された。しかし、その後の経験文化科学の展開は、社会科学的な理論や方法論を志向しつつたとはいいがたい。1980年代以降は、社会科学よりも「文化研究」という姿勢をより明確に打ち出している。そしてこの過程で、文化人類学やカルチュラル・スタディーズと接近するようになっていった。

ただし、このような文化研究への「転回」は、経験文化科学ないし民俗学に特有のものではない。人文社会科学の複数の分野で、「文化」は研究対象として前景化してきた。たとえば社会学においては、「生活世界的転回」とも呼ばれる問題関心の転回があり、歴史学では文化史、文脈への関心が高まって、「文化的転回」あるいは「解釈学的転回」とも呼ばれている。この傾向は、哲学においても同様である。

この状況で、1970年代初頭に社会科学に接近し、社会科学の方法論的規準をととのえつつあった経験文化科学も、その方向を修正していった。経験的社会科学の方法論的規準よりも、ソフトな方法への志向を前面に押し出し、女性研究も加えて、文化の分析や解釈を論じるものが増えていった。前節にみた研究所便覧の文には、そのような問題関心が明らかに投影している。

さて、テュービンゲン大学の経験文化科学は1970年代以降、多くの卒業生を世に送り出してきた。90年代半ばの段階で履修学生は600人、修士号取得者は300人、博士の学位取得者は70人以上というデータがあり、履修学生数も含めて、現在はさらにその数が増加している。優秀な学生が育っている一方で、学生の就職状況は厳しい。そこで指摘されているのは、文化的転回以降、文化研究をおこなう分野がきわめて多岐にわたる一方で、さまざまな領域で行われている文化研究の専門性が低くなっていて、その結果、卒業生の就職においても、専門性にあまり違いのない多くの修士号取得者が、パイを奪い合う状況がおこっているということである。ベルリン・フンボルト大学やミュンヘン大学など、他の大学においても、状況はあまりかわらない。

4 大学教育の素描

私たちが学んできた文化人類学の教科書において、民俗学は文化人類学と近い関係にあるとされ、しばしば文化人類学の下位のサブ領域として位置づけられていた。しかし、これまでテュービンゲン大学を例として見てきたドイツの民俗学の展開の過程は、ドイツの民俗学と文化人類学との関係が、ひとつおりの静態的な組織図のなかで把握されるようなものではないことを示している。両者の関係は、歴史的社会的な背景にも影響をうけて、大いに変化してきた。

文化人類学とドイツの民俗学との関係は、19世紀に学が形成された当初から現在にいたるまで、いくつかの段階に分けて把握できる。そのうち第二次世界大戦後についてみると、ドイツの民俗学内から起こった問題意識、方法論や理論の模索が、文化人類学への接近をもたらしている。1960年代から1970年代初頭にかけて展開した革新運動のなかでの、文化人類学への接近は、新しい分野名称の候補に「文化人類学」があがっていたことに見ることができる。ただし、この時期に国際化を標榜するなかで接近していった文化人類学への関心と、1980年代になってからのそれとは、区別して考える必要がある。80年代の文化的転回以後の関心は、文化研究をめぐるソフトなアプローチ、すなわち主観や解釈を重視する方法の再評価を中心に置いて、文化人類学とともにカルチュラル・スタディーズも射程に含めている。

そこでつぎに、現在のドイツの民俗学がどのような方向に展開しようとしているのか、実際の大学教育のプログラムをとりあげて、見ていくことにしたい。ドイツの民俗学の方法論がどのように教育されるかという関心から、方法論を教育するゼミナールと、その応用編としての調査に注目する。具体的にとりあげるのは、私がほぼ1年間滞在して、授業に参加した経験ももっているベルリン・フンボルト大学の「学生による調査プロジェクト」と「ヨーロッパ民族学の経験的方法入門」である。

調査プロジェクト

「学生による調査プロジェクト」は、教室で学んだ経験的方法論の実践編ともいえる授業である。これに対応する授業内容を日本の教育制度の中に探すとすれば、調査実習がこれにあたるだろう。だが、その規模や目的、それにかかる労力や時間は、日本の多くの大学でおこなわれている実習よりもはるかに大がかりである。学生による調査プロジェクトは、2、3年間のプロジェクトとして計画され、通常は教員1名(場

合によって2, 3名) が率いる。プロジェクト準備から調査, その成果公開の企画と刊行までが含まれる。具体的には, 一週に4時間程度の授業時間をあてて, テーマに関連する理論, 先行研究, 調査方法, 調査テーマをめぐる議論を重ねた後に, 調査をおこなう。調査後成果をもちより, 議論を重ねて, 成果公開について企画し, その準備, 実践, 刊行までおこなって, プロジェクトを終了する。プロジェクトによって違いはあるが, どのプロジェクトも, はじめから終了まであわせて数年をかける。成果公開の形は, 図書の出版, 展示および図録出版, 映画制作などさまざまな形がありえる。こうしておこなわれた学生プロジェクトの成果のなかには, 図書や博物館展示として, 高い評価を受けたものも少なくない。このプロジェクトが修士論文や博士論文に発展することもあるが, いつもそうであるわけではない。いずれにしても, 多くの学生にとって, 論文を除けば学生時代にもっとも力を注ぐのがこのプロジェクトであり, それゆえもっとも思い出深いものになる。2007年夏学期の時点で, ベルリン・フンボルト大学で進行中のプロジェクトを資料2に示した。これを見ると, 現代的な問題関心を示すものが多く含まれていると同時に, ドイツ社会の要請にこたえた課題も多く選ばれていることに気がつく。プロジェクトのなかには, 博物館や自治体の要請によって着手されているものも少なくない。

調査プロジェクトが経験的方法論の実践編とするなら, その経験的方法の核にあるのは, フィールドワークである。ドイツの民俗学で「フィールドワーク」は, 1980年代に方法論として明確に意識化された。それ以前も「収集」調査はなされていた

資料2 学生による調査プロジェクトのテーマ

ベルリン・フンボルト大学 2007年夏学期に継続中のもの

- 「精子バンク—生殖医療における男性性の再構築」(2006/07 冬学期—)
- 「ベルリンのストリート—伝記と民族誌」(2006 夏学期—)
- 「プレッティン 2002 —エルベ洪水」(2006 夏学期—)
- 「東ドイツ女性の日常」(2005/06 冬学期—)
- 「東西ドイツの手紙交換 1949–1990」(2005/06 冬学期—)
- 「愚か者であふれる村—カーニバル・田園風景・極右」(2005 夏学期—)
- 「生活様式としての持続性—オルタナティヴ農業の文化生態学」(2005夏学期—)
- 「人権と公正の人類学」(2004/05 冬学期—)
- 「サッカー, 伝記, 文化」(2004/05 冬学期—)

が、それはフィールドワークと認識されたものではなかった。フィールドワークという方法論の意識化は、「参与観察」という調査のスタンスを重視するものであり、文化人類学から取り入れたものであることはいうまでもない。ここで注意したいのは、この方法論をドイツの民俗学がどのようにとりこんでいるのかということである。

経験的方法論

そこで次に、この方法論が大学でどのように教育されているか、見ていこう。「ヨーロッパ民族学の経験的方法入門」は、基礎課程ゼミナールの必修授業である。履修者が多いために、同時に2つの授業が開講されていて、それぞれを1名の教員が担当しているが、授業は共通のシラバスにしたがって進められる。資料3に、2002/03年冬学期のおよその内容を提示した。

いうまでもなく、フィールドワークは文化人類学の基底にある方法論であるが、その教育方法にすべての人類学者が納得するようなマニュアルがあるわけではない。ドイツの民俗学においても、その状況に大きな違いがあると思えないが、それでも、どのような文献を読ませるか、どのようなキーワードによって方法論を構築するか、ということから、ある程度の傾向を把握することは可能であるし、隣接する分野をどのように配置しているかをうかがうことができる。このような観点から、資料3を見てみたい。

リストから読み取るとはさまざまあるが、ここでは細部に立ち入ることはしないで、おおよその傾向をいくつかあげることにする。第一に、フィールドワークに関して多くの文献を扱っていて、第二にその範囲が広いことをあげることができる。ドイツの民俗学のハンドブック的な文献、古典的な文献に、アメリカの民俗学もとりこんでいる。その一方で、B・マリノフスキー Bronislaw Malinowski をはじめとする文化人類学の研究書や入門書、社会学からも数多くとりあげている。フィールドワークそのものの理解とならんで、実際のフィールドワークを行うための技術にも、かなりの配慮がなされている。とくに実践のレベルではアメリカやヨーロッパの社会学や民俗学の文献をとりあげて、ノートのつけ方やインタビューのすすめ方、データ処理の方法など、具体的な技術が教えられる。

このような方法論については、さまざまなことを考えることができるが、ここではひとつだけ感想に近いことを述べておこう。隣接する複数の分野を横断して、ひとつの学問分野が再生産されていくとき、その分野はどのような形をなしていくのか、ということである。研究者が、自らの研究活動のなかで、隣接分野の成果を取捨選択し

資料3 「ヨーロッパ民族学の経験的方法入門」

[注] ベルリン・フンボルト大学 2002/03 冬学期開講基礎課程ゼミナールの共通シラバスをもとにして、森が作成した。文献については、独語になじみのない読者の便宜を考えて、英語は原語で、独語のものは和訳し、日本でもなじみの深い文献の独訳はその旨を示した。

#1 導入（研究グループ構成）

#2 “So what do you want from us here?” —エスノロジーのフィールドワーク

〈文献〉 Myerhoff 1978 *Number Our Days* より一部

シヨスタク『ニサ』より一部（独訳）

マリノフスキー『西太平洋の遠洋航海者』より一部（独訳）

#3 理解—ヨーロッパ民族学の定性的方法の特殊性へ

〈文献〉 ホナー 1993『生活世界のエスノロジー』より一部（独語）

ギアツ「住民の視点から」（独訳）

#4 調査研究領域としての集団・周縁集団・コミュニティ—調査計画と経過

〈文献〉 クネヒト編 1999『都市の裏側—ベルリンの貧困と排除』（独語：学生調査プロジェクト成果）

ニーダーミュラー編 2002『秩序変更／無秩序—ベルリンの社会的争点』（独語：学生調査プロジェクト成果）

〈フィールドワーク・グループ〉

調査の発想と構想（場所、質問内容、研究計画、方法とスケジュール）
提出

#5 エスノロジーのフィールドワークの歴史へ

〈文献〉 イェグレ 1984「民俗学フィールドワークの歴史」（独語）

Burgess 1984 *In the Field, An Introduction to Field Research* より一部

アマン／ヒルシャウアー 1997「自文化の他者化」（独語）

#6 フィールドへのアプローチ

〈文献〉 リントナー 1981「フィールドへの不安」（独語）

Agar 1980 *The Professional Stranger*

ヴァックス 1979「フィールドワークのはじめの不快な段階」（独語）

#7 参与観察

〈文献〉 *Handbook of the Methods in Cultural Anthropology* 1998 より一部

Burgess 1984 より一部

ヴェルツ 1991 『ストリートライフ—ニューヨークのスラムの日常』
より一部（独語）

#8 フィールドノート：ドキュメント化とメモ

〈文献〉 ロフランド 1979 「フィールドノート」（独語）

Emerson 1995 *Writing Ethnographic Fieldnotes* より一部

Sanjek 1990 *Fieldnotes: The Making of Anthropology* より一部

〈フィールドワーク・グループ〉

自分のフィールドノート提出

#9 インタビューとインタビュー技術

〈文献〉 ブルデュー 「理解」（独訳）

ホナー 1993（前出）より一部（独語）

フリック 2000 『調査ハンドブック』より一部（独語）

#10 伝記インタビューとオーラルヒストリー

〈文献〉 Plummer 1983 *Documents of Life, An Introduction to the Problems and Literature of a Humanistic Method* より一部

フォアレンダー 1990 『オーラルヒストリー』（独語）

#11 方法論の組み合わせと民族誌フィールドワークのさらなる方法

〈文献〉 Burgess 1984（前出）より一部

ゴエルナー 1982 『認識の散歩』より一部（独語）

#12 研究者：フィールドでの役割。プロセスと相互作用としてのフィールドワーク

〈文献〉 Warren 1988 *Gender Issues in Field Research* より一部

イエグレ 1982 「フィールドワークの秘密」（独語）

Terrio 1998 “Deconstructing Fieldwork in Contemporary Urban France”

#13 データの処理と評価

〈文献〉 ホナー 1993（前出）より一部（独語）

Fetterman 1998 *Ethnography. Step by Step* より一部

Atkinson 1997 *The Life Story Interview* より一部

#14 フィールドワーク・グループ報告（2クラス合同で2日間）

ていくことと、大学教育の過程において、みずからの意思決定によらずに、他の分野の蓄積が、方法論として与えられることとは、同じではない。そうしてできあがっていく学問分野は、教える側が意図しなかったものになることもあるだろう。

ここで問題にされていることは、フィールドワークという方法論である。文化人類学においてフィールドワークが基底的な方法論でありつづけている理由を、私はふたつ考えている。ひとつは、フィールドから問題をたちあげていく基本的な姿勢である。もうひとつは、フィールドにおける問題発見の経験を、異なるフィールドの研究者と共有する議論の場が用意されていて、その議論が学を構成するシステムとして機能していることである。このふたつは、文化人類学を一面で不器用なものにしているが、同時に、文化人類学に他の学問分野にはないパワーを与えてもいると、私は考えている。だが、ヨーロッパのフィールドで得られた知見を、ヨーロッパのフィールドに還元していく「ヨーロッパ・エスノロジー／民俗学」の経験的方法に、このような文化人類学の方法論的基盤と結んだパワーが移植されることはない。そこでは、文化人類学のフィールドワークの特徴である、荒削りの角のような部分がそぎ落とされて、使いまわしのさく最大公約数的な部分だけが、フィールドワークというラベルをつけたまま受容されているように見える。もっとも、そこに別の何かが、これからつくられていくということも、あるかもしれない。接近しながら重なり合うことのない隣接分野との差異は、このようなズレからつくられていくものなのだから、その差異が生産的なものとなり、ヨーロッパ・エスノロジー／民俗学が、文化人類学にとって大いに関心をかきたてる隣接分野になる可能性もある。

5 隣接分野としての民俗学

これまで私は、ドイツの民俗学が、時代の社会的文脈のなかで、文化人類学と接近し、多くを共有するようになってきたことを描いてきた。しかしながら、両者がびたりと重なり合うわけではもちろんなく、接近しながら、同時に差異もつくられつつあると考えるべきだろう。そのゆくえについては、この状況をもう少しみてゆく必要がある。ここでは、これまでに述べてきたことをふまえて、ドイツの民俗学が戦後大きく展開してきた流れを概観し、この過程を文化人類学の隣接分野としてどのように理解できるのか、かんたんに述べて、本稿をむすぶことにしよう。

ドイツの民俗学は、地方の文化の再評価という「文化」概念から出発し、19世紀から20世紀にかけて近代国家の発展期のなかで、国民文化をになうゲルマニス

ティークのなかの一分野としてその輪郭を形成した。1930年代に国民社会主義政権下でゲルマニスティークから独立し、政権の称揚する文化政策に協力するようになったのち、敗戦を迎える。戦後は、国民社会主義との関係の反省から学の根本的な批判をおこない、社会科学の理論、方法論に学び、国際性をそなえることをめざした。60年代から70年代にかけて、ドイツ社会に市民運動、社会運動が展開した時期に、テュービンゲン大学の民俗学は、フランクフルト学派から多くを学び、その「経験」概念を学の方法論として位置づけ、従来の「民俗学」^{フォルクス Kunde}にかえて分野名称を「経験文化科学」とあらためた。テュービンゲンにつづいて、他の大学でも名称の変更がおこなわれていったが、新しい名称は大学によって異なる。1980年代以降、人文社会科学全般に「文化的転回」とよぶべき動きが起り、70年代初頭の社会科学への志向は、軌道修正されることになる。文化研究という学の位置づけが再認識され、文化人類学のフィールドワークや解釈人類学を、意識的に取り入れるようになった。そのなかで各大学の民俗学研究所の名称変更は進行し、「ヨーロッパ・エスノロジー」「文化人類学」が大勢を占めるようになっていった。さらにこの動向は、文化人類学と平行して、イギリス・バーミンガム派のカルチュラル・スタディーズの成果も積極的に取りこみながら、現在にいたっている。たとえば2007年は多くの大学研究所が「文化」研究を主要な研究テーマとしてあげているし、また授業においても「文化」をテーマとした複数のゼミナールが開講されている。一例をあげると、テュービンゲン大学で2007年夏学期に行われたB・チーフエン Bernhard Tschofenによる「文化理論」という講義は、I・カント Immanuel Kant、ヘルダーからはじめてS・ホール Stuart Hall、P・ギルロイ Paul Gilroy、A・アパデュライ Arjun Appaduraiにいたるまでをとりあげ、そのあいだに民俗学、社会学、文化人類学のさまざまな文化研究を配置して構成したものだ。

1980年代以降現在にいたるドイツの民俗学が向かっている方向は、文化研究という側面に注目してみる限り、文化人類学が関心を寄せている方向と、それほど大きな違いはないだろう。ただし、このことと、それを実践的な研究に移したときに、どのような成果が得られるか、ということは別である。前節に述べたように、これまでのところ、それぞれの分野は共有するところをもちながら、差異も再生産しているように思う。

最後に、文化人類学の立場からこの隣接分野をとらえるときに、重要なポイントになると思われることを、雑駁なままに書き留めておきたい。

その第一は、「異文化研究と自文化研究」をどう考えるか、ということである。異

文化と自文化という区分は、おそらく21世紀の世界においては、それほど有効性をもたないだろうと思われる。現代の都市的環境においては、異文化と自文化は混淆していることが前提ともいえる状態であって、研究対象となるのは、それを区分することではなく、それがいかに混淆しているか、その状況を明らかにすることである。事実、文化人類学の研究において、異種混淆の都市的環境の研究は重要性を増してきている。また一方の、ドイツの民俗学研究は、バウジンガー以来、都市的環境の調査研究に意識的に取り組み、蓄積もしてきた。であるとするならば、隣接分野としての民俗学と文化人類学とは、異種混淆の都市的環境の調査研究において、生産的な対話をおこなうことが期待できる。この状況では、民俗学は自文化を研究し、文化人類学は異文化を研究するという区分は、もはやナンセンスなアナクロニズムにほかならない。

ここで念のため、私は人類学の異文化研究の意義を否定しようというのではないことを、急いで断っておこう。私が言いたいことは、人類学は、異文化研究において培ったその方法論や問題の切り取り方、パースペクティブについて、自文化／異文化という区分とは異なる語り口で、語るべき時代になってきているのではないか、ということである。そして民俗学についても、このことは該当すると考えるのである。

第二は、「文化研究」の立場と「社会科学の方法論」との関係は、どのように考えられるのかということである。この問題については、カルチュラル・スタディーズというもうひとつの項目を加えて、それぞれの位置関係から考えることにしよう。文化人類学、民俗学、カルチュラル・スタディーズのそれぞれは、文化研究をおこなう分野として比較的近い関係にあり、互いに重なり合いながら差異をもっている。その差異がどのような種類のものであるかということは、それぞれの分野が社会科学的方法論に対して、どのようなスタンスをもっているか、ということから説明できると思う。文化人類学とドイツの民俗学は、あきらかに社会科学的方法論にある執着をもっているが、それがどのような社会科学的方法論であるか、ということに違いがあると私は考えている。大づかみにいうなら、前者には構造機能主義およびそれと必ずしも矛盾しない構造主義的な傾向が強く見られるのに対して、後者にはフランクフルト学派の代表する社会哲学的な傾向が強い。これに対して、カルチュラル・スタディーズは、文学・歴史研究から発した問題発見のあり方や、問題への接近方法を特徴としている。同じように文化研究をおこなうにしても、文化人類学と民俗学は社会科学的方法論をとりこんだうえで、文化研究を実践しようとしていくところに特徴があり、さらにその依拠する社会科学的方法論が異なっていることが、両者の問題のとらえ方の

違いに投影している、というのが現在のところの私の見解である。

第三に、文化人類学が社会のなかでどのような位置を占めるのか、今後はより意識的に問う姿勢が必要になるだろうことを、付け加えておこう。ドイツの民俗学は、社会のなかで重い課題を負い、それを克服しようとする努力を契機として、学の見直しを内部から批判的におこなってきた。文化人類学がそれをそのまま做うのではなくても、学門分野が社会にどのように位置づけられるのか、批判的にとらえる視点は必要だろう。今日では、文化人類学のなかにも、社会への貢献を強く意識した研究がいくつもおこっている。このような研究からより深い議論が展開していくことを期待したい。

文化人類学もドイツの民俗学も、それぞれがその隣接分野との境界を見直しながら展開しつつある。民俗学以外の隣接分野も含めて、人文社会科学の諸分野の関係について再考することは、分野の対象設定、方法論、パースペクティヴ、スタンス、社会におけるその位置づけなどを再考するうえで、有効な参照点を与えてくれる。人文社会科学の再編が問題にされる今日、境界線の見直しそのものも求められているが、私個人としては、ドイツの民俗学の批判的な性格と、社会や国家のなかでのその位置づけについて、しばらく勉強を重ねていきたいと思う。

謝 辞

小稿のもともなる調査研究において、テュービンゲン大学ルートヴィヒ・ウーランド経験文化科学研究所の R・ヨーラー教授 Prof. Dr. Reinhard Jöhler, B・チョーフエン教授 Prof. Dr. Bernhard Tschöfen と、ミュンヘン大学民俗学／ヨーロッパ・エスノロジー研究所の J・モーザー教授 Prof. Dr. Johannes Moser, ベルリン・フンボルト大学ヨーロッパ・エスノロジー研究所の W・カシューバ教授 Prof. Dr. Wolfgang Kaschuba, R・リントナー教授 Prof. Dr. Rolf Lindner のご助力をえた。記してお礼申し上げます。

なお小稿は、2007年度より3年計画で実施している科研費による調査研究（「戦後民俗学の展開に関するドイツと日本の比較研究—社会における学問実践の形」研究代表者 森明子、基盤研究（B）課題番号:19320141）の中間段階の成果報告として位置づけられる。

注

- 1) エスノロジーという語は、通常日本語では「民族学」と訳されているが、民族学に対応するドイツ語は、エスノロジーとフェルカーケンデのふたつある。一方、日本語は民族学と民俗学を同じ音で表わすことから、ドイツ語名称を日本語で表記する本稿において、これらの区別がきわめてわずらわしいことになる。民族学と民族学、あるいはエスノロジーとフェ

ルカーンデとすれば（さらに民俗学や^{フォルクスクンデ}フォルクスクンデを加えることも可能であるが）、厳密で規則的にもみえるが、前者はわずらわしくまぎらわしいし、後者はドイツ語になじみのない読者には苦痛であると考えて避けた。

文 献

- アドルノ, テオドール・W
 1979 「社会学と経験的研究」アドルノ, ポパーほか『社会科学の論理』城塚登ほか訳, pp. 85–108, 東京: 河出書房新社。
- アドルノ, テオドール・W ほか
 1979 『社会科学の論理』城塚登ほか訳, 東京: 河出書房新社。
- Bausinger, H.
 1986 [1961] *Volkskultur in der technischen Welt*. Frankfurt/New York: Campus Verlag.
- Beck S. und L. Scholze-Irrlitz
 2001 Berliner Diskussion: Perspektiven Europäischer Ethnologie—Versuch einer Zwischenbilanz. Gespräch zwischen Wolfgang Kaschuba, Peter Niedermüller, Bernd Jürgen Warneken und Gisela Welz, *Berliner Blätter* 23: 167–190.
- Bendix, R.
 1998 Of Names, Professional Identities, and Disciplinary Futures. *Journal of American Folklore* 111(441): 235–246.
- Dow, J. R. and H. Lixfeld (eds)
 1986 *German Volkskunde: A Decade of Theoretical Confrontation, Debate, and Reorientation (1967–1977)*. Bloomington: Indiana University Press.
- Korff, G.
 1996 Namenswechsel als Paradigmenwechsel?: Die Umbenennung des Faches Volkskunde an deutschen Universitäten als Versuch einer 《Entnationalisierung》, In *Fünfzig Jahre danach: Zur Nachgeschichte des Nationalsozialismus*, Hochschulverlag A.G.: 403–434.
- 森 明子
 1993 「中欧研究における歴史学と人類学—Historische Anthropologie 誌によせて」『民博通信』62: 54–67。
 2004 「ドイツ民俗学からヨーロッパ民族学へ—ベルリン, フンボルト大学の試み」森明子編『ヨーロッパ人類学—近代再編の現場から』pp. 25–26, 東京: 新曜社。
- 坂井洲二
 1982 『ドイツ民俗紀行』東京: 法政大学出版局。

〈研究所が発行する要覧, HP 等〉

- Institut für Europäische Ethnologie und Akademisches Auslandsamt der Humboldt-Universität zu Berlin
Institut für Europäische Ethnologie. Humboldt-Universität zu Berlin, Stand Juni 2000.
- Institut für Kulturanthropologie/ Europäische Ethnologie, Georg-August-Universität
<http://www.kaee.uni-goettingen.de> (2. Juli 2008).
- Ludwig-Uhland-Institut
Ludwig-Uhland-Institut für Empirische Kulturwissenschaft, Eberhard Karls Universität Tübingen.